ふるさとに思いを寄せて

「ふるさとの集い」に参加した方から、中山町での思い出と、ふるさとへの思いを語っていただきました。

▼旧 豊田中学校（昭和28年卒業）の皆さん

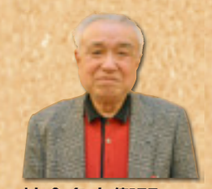
「原点はふるさとに」

大津弘一（ひろいち）さん（写真左端。出身：柳沢／現住所：神奈川県川崎市）は、大学卒業後に上京されました。

「不安よりも一人前になれる嬉しさの方が勝っていたような気がします」とのことですが、「いざ上京してみると、『田舎者だからと値段をごまかされたりしないか』と、食事をするにも勇気がいった。幸い、そういったトラブルはありませんでしたが…」と当時を懐かしみ、笑いながら話してくださいました。中山町での思い出を尋ねてみると、「小学生の時に理科に興味を持ち、毎日のように外に出て天体観測をしました。そのうちに好奇心がどんどん膨らみ、大学は工学系の学部に、就職でも大学で学んだことを活かせるところに勤めました。私の原点は、『もっと知りたい』という思いと好奇心を刺激してくれた、ふるさと中山町の自然にあるのだろうと思います」と振り返っていました。

▼旧 豊田中学校（昭和25年卒業）の皆さん

▲柏倉多右衛門さんの作品「凄命のちから」（第54回日本版画会展入選）。お達磨の桜を題材にしています。



柏倉多右衛門さん
出　身：岡
現住所：栃木県大田原市

「ふるさとの景色、いつまでも」

柏倉多右衛門さんは、転職のため50代半ばで地元を離れました。現在は退職され、お住まいの栃木県大田原市にギャラリーを構え、版画や彫刻を楽しんでいます。その腕前は栃木県版画大賞を受賞したり、日本版画会展で入選するほどです。

柏倉さんが手がける作品には、お達磨の桜や楯の大イチョウなど、町のシンボルを題材にしたものもあります。柏倉さんは作品について、「生まれ育った中山町は、私にとって大切な場所です。幼いころに何気なく見ていた景色も、今となっては宝物。見るたびに感動が蘇るよう、ふるさとの懐かしい風景を作品として残したいと思ったのです」と語り、今後の作品作りにさらなる意欲を見せていました。

▼旧 長崎中学校（昭和29年卒業）の皆さん

「ほっとする素朴さが町の魅力」

伊藤さんは高校を卒業後、ふるさとから遠く離れた愛知県で就職。学生時代から続けていたバレーボールの実業団チームにも所属し、活躍された後、結婚を機に東京都世田谷区へ移られました。

「当時は、田舎者と思われないよう一生懸命標準語を話そうとしていました。今では山形より東京での生活が長くなり、すっかり標準語が身に付いたと思っていたのですが、ふとした時に山形弁が出てしまい、思わず笑ってしまいます。何年離れていても、やっぱり山形の人間なのですね」「かわいい孫や大切な家族がいる東京を離れたいとは思いません。でも、時々懐かしい人たちに会いに中山町に帰りたくなります。いつまでもほっとする素朴さで迎えてくれる中山町であってほしいと思います」とふるさとへの思いを語ってくださいました。

伊藤喜代栄さん
（旧姓　高橋）
出　身：新田町
現住所：東京都世田谷区

▼旧 豊田中学校（昭和32年卒業）の皆さん

「同郷の絆、心強かった」

武田さんは、高校卒業後、就職のため上京されました。

当時の心境について、「同じ会社に高校の先輩がいらっしゃったこともあり、地元を離れることに対する不安は少なかったように思います。会社にも、私と同じように山形から出てきている者が多く、同じ風土で育った仲間同士、励まし合っていました。同郷の絆のようなものを感じ、心強かったですね」と振り返り、今後の中山町について、「もちろん、多くの人が住みたくなるような発展・開発は必要です。しかし、他にはない中山町ならではの優しく温かい雰囲気は変わらずにあってほしいと思います」と思いを語ってくださいました。

武田　英明さん
出　身：小塩
現住所：千葉県市川市

おわりに

面積わずか31.23平方キロメートルの中山町。大きなショッピングモールも娯楽施設もなく、「何もない町」と言う方もいます。でも、「『何もない』からこそ、日常が満たされていた。離れてみて、そのことに初めて気付きました」と出席者の皆さんは口を揃えます。

都会のような派手さはありませんが、素朴でどこか懐かしく、人の温かさ・優しさにあふれる中山町。私たちにとってそれはあまりに当たり前で、つい見落としてしまいがちですが、素朴で「なにもない」日常こそ中山町の魅力で、宝物なのかもしれません。そして、それこそが中山町が多くの人にとって特別な場所であり続ける所以（ゆえん）なのではないでしょうか。